

「みんなの力を合わせて柴犬の見る力を守りましょう！」

鳥取大学農学部附属動物医療センター獣医神経病腫瘍学分野
 准教授 伊藤典彦

柴犬の眼の病気と言えば、もちろん緑内障です。小生が鳥取に着任してからの8年間で経験した症例を表にまとめました。全9症例の18眼中、見る力が残っているのはわずかに2眼だけです。現時点では治すことが難しい眼の病気の一つです。しかしながら、飼い主さんが、かかりつけの獣医さんが、そして大学ができることがあります。

症例	性別	初発眼	初発時年齢(歳)	発症間隔	視機能(初発眼/後発眼)
1	雌	左	6	2日	X / X
2	雄	不明	9	1箇月	X / X
3	雄	右	12	4箇月	X / X
4	雌	右	14	5箇月	X / ○
5	雄	右	8	6箇月	X / X
6	雄	右	9	10箇月	X / X
7	雌	右	7	1年1箇月	X / X
8	雌	左	7	2年8箇月	X / X
9	雌	左	4	未発症	X / 未

>柴犬の緑内障では、8歳前後で片眼性に発症し、1年以内に反対の眼も発症し、

最後には両眼の見る力を失います。

柴犬の緑内障の特徴を各項目の平均値で提示します。

1. 発症年齢 8.4 歳
2. 片眼性に発症 100 %
3. 両眼性に進行 89 %
4. 発症間隔 8.9 箇月
5. 視機能残存 6 %

症例9では、両眼性への進行がみられておりません。この症例は本年、片眼に発症した症例で反対側の眼に発症することなく4箇月間経過を観察しております。この病気の特徴を見れば、いつ反対側の眼が発症してもおかしくありません。すなわち両眼ともに見る力を失ってしまう不治の病です。

>発症後直ちに治療を開始できれば良くなる可能性があります。

症例4では、すでに右眼の見る力を緑内障で失っていました。5箇月後に反対側の左眼が発症しましたが見る力を残すことができています。この症例では、反対側の眼を発症した当日、ただちに来院していただきました。お昼頃に元気がなく、左眼を開けたがらない様子に気づきました。当日は月曜日、直ちにお電話をいただき大学へ向かいますとのことでした。大学までは約3時間のご遠方の方でした。左眼では、角膜全面の混濁、虹彩後癒着、前房の炎症がみられました。眼圧計が振り切れ、眼圧は測定できませんでした。左眼は開けていましたが物にぶつかっていました。反対側の眼の緑内障の発症でした。

血液検査とレントゲン検査で浸透圧利尿剤の適応であることを確認しました。全身では浸透圧利尿剤の持続点滴静脈注射を、左眼では散瞳剤、ステロイド剤、抗緑内障治療薬の点眼を開始しました。2時間後には16mmHgまで眼圧が降下、角膜の混濁は改善しました。見えるようになった様子で、ものにぶつからず歩けるようになりました。発症後、直ちに治療を開始することができ、治療によく反応してくれました。翌週に再診させていただき、虹彩後癒着は残るものの良好な経過を確認しました。とは言っても、本稿執筆の時点ではまだ2週間の経過であり、予断は許されません。

>飼い主さんへ

すでに片方の眼に緑内障を発症した柴犬の飼い主さんにおかれましては、たいそうご心配なことと拝察します。もう片方の眼の見える力を守るために、以下の兆候が見られた場合には、直ちにおかかりつけの獣医さんへ、あるいは大学へお電話ください。

1. 眼を開けたがらない
2. 元気がない

>かかりつけの獣医師さんへ

大学受診までに時間がかかる場合は、現地にて直ちに初期治療を開始することを考慮してください。スリットランプなくして正確な診断は困難かもしれません。ただし、柴犬の緑内障は片眼性に発症します。眼圧計がなくても左右眼の触診で眼圧の上昇を検出することができる場合があります。申し訳ないのですが、大学では、土日は休診をいただいております。

す。ご遠方にて金曜日に発症した場合、受診は3日後になってしまいます。飼い主さんとのお話し合いの上で、最善の方法をご検討ください。

1. D-マンニトール等の浸透圧利尿剤での眼圧降下
2. プロスタグランジン関連薬以外の点眼液での眼圧降下
3. ミドリンPでの瞳孔の運動
4. ステロップ点眼液での炎症の制御

はやる気持ちもありますが、浸透圧利尿剤の使用に際しては添付書の「使用上の注意」に従ってください。D-マンニトールを例にとりますと、以下の患者へは慎重投与となっています；脱水状態の患者、尿閉又は糖尿病性腎症等の腎機能障害のある患者、全身性疾患(心疾患、肝疾患など)により腎機能が低下している患者・高齢者です。また、副作用もあります；急性腎不全、電解質異常です。血液検査やレントゲン検査等での全身状態の確認は必須です。利益が不利益を上回ることを十分に確認してから治療を始めましょう。

>柴犬の見る力を守りましょう！

片方の眼が発症した場合、反対側の眼が発症することは確実です。なんとか後から発症する眼だけでも守りたいと思っています。発症に備えてできることが現代の獣医眼科学ではいくつかありますが、いずれの方法にも確証はありません。必ず見る力を守ることができる保証はありません。飼い主さんとは、しっかりと話し合いをし、ご理解が得られた場合には全力で取り組む所存です。今、眼の前にいる柴犬の、その子供たちの、その孫たちの見る力を守るために。

動物医療センター眼科 伊藤